

今月のみことば 2019年9月

「キリストは、すべての人の贖いの代価として、
ご自分を与えてくださいました。」
(テモテへの手紙第一2章6節)

キリストを主とする人生

今から150年前、アメリカでは北部と南部に分かれて内戦が続いていた。4年にも及ぶ内戦により、多くの被害が記録された。あるデータによると、死者数は100万人近くにも及ぶという。この内戦は、南北戦争と言われているが、奴隷制を否定する北部と奴隷制を肯定する南部との内戦で、貿易に関しても真っ向から対立する大きな問題をはらんでいた。しかし、このような内戦下で、ある出来事があった。

南部連合の専属の従軍牧師は、いつものようにテントをまわり、負傷した兵士たちを見舞っていた。ある日、負傷したある若い兵士を見舞った際に、「何か祈ってほしいことがあるか」と尋ねた。大抵の兵士たちは「一刻も早く回復したい」「完全に癒されたい」と返答したという。しかし、この兵士の祈りのリクエストは、自分の母親への感謝だった…。



この兵士の祈りのリクエストは、自分が幼い時から母親が自分を育てるために犠牲にしたこと、聖書を開き何度も話してくれたこと、自分のために何度も声を出して祈ってくれたこと、そして何より母親自身が、忠実に主イエス・キリストに従う信仰の姿勢を示してくれたおかげで、自分のこれまでの日々において、常に聖書の言葉をたくわえ、イエス・キリストに忠実に歩むことができたことを、ただただ感謝するものだった。恵みあふれる神が、こんなにも素晴らしい母を、自分に与えてくださったことを感謝する、祈りのリクエストだった。

従軍牧師が、彼のために祈った後、ほどなくして、彼は息を引き取った。

彼が息を引き取るほんの直前に、彼は、従軍牧師に一つのことをお願いした。「自分が息を引き取った後、自分の母親に連絡してほしい。あなたの息子は、イエス・キリストを人生の主として、この世で人生を終えました」と。

私たちは、死について見つめる機会があまり多くないように思える。しかし、やがて人生のレースを走り終えた時には、必ず死がやってくる。また、ゆっくり死がやってくる場合もあるが、突如として死と直面することもあり得る。それは、私たちがいつ誕生するのか、とはっきりと予測がつかないのと同じように、いつ死ぬのか、ということもはっきり知ることはできない。何よりも、人は何のために生まれ、死んだ先はどうなっているのか、ということさえ分からず日々を過ごしている。しかし、聖書には、その答えが明確に記されている。そして、神は、私たちに絶えず語りかけてくださる。

「あなたのためのキリストだ。受け取りなさい」「キリストを信じなさい」と。その応答に従うか、従わないか、は私たちに委ねられている。

この若い兵士の母親への最後のメッセージにもあるように、彼はイエス・キリストを主とし、生涯を全うした。その生涯は実に感謝であったことが伺える。私たちも、人生の最後に残す言葉があるとするれば、何であらうか。そして、何を心の中心に据えた人生とするだろうか。